



2013年度 日本ポニーベースボール協会 第39回 全日本選手権大会

大会細則

【大会運営に関する規定】

1. ダッグアウト入りは、全日本選手権大会出場選手として登録された選手18名までとする。
18名の選手がプレーできる。
シートノックの補助要員は、18名登録の場合は認めない。
18名未満の登録のチームは、18名の範囲内で認める。(15名登録では、3名まで)
登録選手以外の補助要員は、練習用ユニホームを着用すること。
なお、守備位置につかずシートノックの補助をする選手はヘルメットを着用すること。
2. コーチボックスには、監督、コーチ、選手のいずれかが入る。必ずヘルメットを着用すること。
選手を出す場合は、出場可能選手18名中に限る。選手は両耳ヘルメットを必ず着用する。
監督、コーチは耳当てなしでもよいが、色はチームに合わせる。マークはなしでもよい。
3. 既に大会本部へ出場選手として届けられた選手が、ケガや病気等で出場不可能となり
選手の入替えを申請する場合は、大会初日、第一試合の打撃順表提出前迄に医師の
診断書を添えて登録選手変更願いを大会本部まで提出しなければならない。
4. 成人指導者3名はユニフォームを着用すること。
ユニフォームを着用しないスコアラー1名のダッグアウト入りは認めるが、
Tシャツやアンダーシャツでの球場立ち入りは認めない。
5. トーナメントエンブレムを付けていないユニフォーム着用の選手および成人指導者の
試合出場は許可しない。
なお、同一リーグで複数のチームが同じ大会に出場する場合のユニホームは、
何らかの方法で明らかにチームの違いが判るようにしなければならない。
選手は、スパイクシューズの色とラインを統一したものを使用する。
ベンチ入りする監督、コーチのシューズは選手と同じ色(ラインを含む)のものを使用する。
6. 病気、ケガ等で指導者が交代する場合は試合開始30分前迄に、監督が交代の場合は
リーグ代表が、コーチが交代する場合は監督が、それぞれ書面で交代後の
監督・コーチの氏名と背番号とを大会本部へ提出する。
(背番号が無いものはユニフォームと認めない)
7. 各リーグは所属する選手、監督、コーチ、スコアラー、審判のために、傷害保険に加入
することを義務づける。
試合中のプレーに関わる事故やケガは、チーム加入の傷害保険で対応する。
8. 用具は協会規定に従うこと。
ベンチ入り選手、スタッフが医療目的以外でアクセサリを着用する事を禁止する。
医療目的の場合は医師の証明書提出を要する。
9. 使用ダッグアウトは組み合わせ表の若い番号が一塁側。
先攻後攻は打撃順表の交換時に決める。
10. 打撃順表は4枚提出する。交換は、第一試合の場合、試合開始予定時刻の40分前に、
第二試合以降は、前の試合の4回終了後に審判室で行う。
審判員は打撃順表の2枚を本部室へ届ける。
本部役員は選手の出場可否を確認後当番へ渡す。

11. 打撃順表交換後は背番号の訂正等、記入間違いの訂正の以外の変更は認めない。
選手名の変更を要する場合は選手交代の規則を適用する。
 12. 次試合チームのブルペン使用は4回終了後、試合中チームの許可を得ることでこれを許可する。補助要員を1名つけること(ヘルメット、グラブ着用)。
尚、投球練習はマウンドの数までとし、捕手は必ずマスク、防具、カップを着用すること。
(両者立ってのキャッチボールの場合は着用を必要としない)
また、試合中のチームも安全義務は上記に準ずる。
 13. 試合前の練習に関しては、ダッグアウト入れ替わり後、10分間与える。
〈一塁側チーム〉前半5分間トスバッティング・後半5分間キャッチボール。
〈三塁側チーム〉前半5分間キャッチボール・後半5分間トスバッティング。
この時、相手チームと選手が重なり合わないよう注意すること。
 14. シートロック時間は5分とする。(ボールまわしを含む)
 15. 選手のテーピング、サポーター、サングラスの使用については、試合前の出場選手確認の際に審判員の許可を得ること。(ミラーレンズのサングラスは不可)
 16. 試合中のダッグアウト前のキャッチボールは1組に限り許可する。
但し、ゴロでのキャッチボールは禁止。
 17. ラフプレーや危険を伴うプレーは絶対にしてはならない。
・ 足を高く上げたり、野手に向かってのスライディングは危険であり、
守備妨害と判定されることもある。
・ ボールを保持していない捕手のブロックについては厳格に判定されるので、
走塁妨害となる。
・ 死球による安全進塁を得るためにわざとボールから逃げない行為。
 18. 打者が捕手の捕球に合わせて「ボール」と発声することや、ベースコーチが送球を捕球する野手に合わせて「セーフ」というような声を発してはいけない。
また、コーチはコーチボックスを離れないこと。
 19. 試合進行のスピードアップをはかるため、3回で1時間を越える試合の場合はボール回しを禁止する場合がある。
この場合、球場を担当する大会役員から球審に通告する。
 20. 捕手(控えの捕手を含む)は必ずセーフティカップを装着すること。
 21. 距離
ポニー
ベース間 25,84m H.P~P.P間 17,41m H.P~2塁間 36,50m
コルト
ベース間 27,43m H.P~P.P間 18,44m H.P~2塁間 38,79m
会長杯
ベース間 25,84m H.P~P.P間 17,41m H.P~2塁間 36,50m
- 注意：本年度の全日本選手権大会の三位表彰は、決勝戦が終了次第おこなう。
(試合用ユニホーム着用)

【 競技に関する規定 】

1. 臨時代走

試合中に死球でケガをし、応急手当でまたは一時休息が必要と判断した場合、手当中や一時休息の間に限り代理選手を起用し、回復後再び試合に復帰することができる。(リエントリー使用とは無関係)

特に胸部から上部に死球を受けた場合や、その他の箇所でも衝撃が大きいと判断した場合は、強制的に最低ハーフィニング(攻守交代になるまで)休養を取らせる。

それ以外、プレー中の走者がキャンバスバッグに躓いて転んだとか、野手と衝突した場合は、そのプレーが終わり次第タイムアウトを要求し、衝撃が大きいと判断すれば直ちにその走者及び野手をダッグアウトへ戻し、最低ハーフィニング休養を取らせる。この場合はリエントリー制度を利用する。

交代要員がいなくなった場合は、出場資格のある者、又は最後に交代した選手を出場させてよい。

2. 投手の投球回数規則及び死球の回数

- ① 1試合において7回を越えて投球することはできない。
- ② 連続する2試合で10回を越えて投球することはできない。
- ③ 打者に1球(アピールのための送球を除く)を投じたとき1回投球したとみなす。
- ④ 途中で交代した投手は、再び投手へ戻ることはできない。
- ⑤ 投球イニングのオーバーが判明した場合、速やかに投手を交代する。
(投球回数は実回数を記録する)
- ⑥ インコース高めには絶対にウエストボールを投げない。もしも投球がそれで頭部に当たったと審判員が判断した場合は、投手は交代しなければならない。

3. 試合の長さ

天候上やむをえず短縮する場合がある。短縮した場合の勝敗は以下の通りとする。

- ① 何等かの理由で試合が途中で中断し続行不可能となった場合、5回を経過していれば試合は成立する。
- ② 試合が正式試合として成立する前(5回未満)にコールドになったとき、および5回を過ぎても得点が同点の場合や、野球規則 4.11 (d) (1) (2) に該当する場合で試合続行が不可能となった場合は一時停止試合(サスペンデッドゲーム)とし、停止時点から別途試合を続行する。(特記規則参照)
- ③ 5回以上進んだ時点で一方のチームが10点リードしているとき、又は5回表を終わって後攻チームが10点リードしているときは試合終了となる。
- ④ 延長戦は12回、または4時間とし、決着がつかない場合は一時停止試合とし、翌日の試合に先立って、または他の試合の間に指定して続行する。

4. 監督・コーチ

- ① ベースコーチは、回(同一イニング)の途中でコーチボックスを交代してはいけない。
- ② 同一回に、監督又はコーチが二度プレーイングフィールドに足を踏み入れた場合、一度目と同一投手であれば投手を交代しなければならない。
(国内大会ではファールラインに投手を呼び寄せたときも含む)
- ③ タイムアウトの要求は、攻撃側、守備側ともにハーフィニングに一回を越えてはいけない。守備側の選手のみがベンチからの指示が有る無しにかかわらず、タイムアウトを要求して、ハドルを組む場合もこれに含まれる。
(バッテリーのみの打ち合せは、これに該当しない。ただし、バッテリーの打ち合わせの間に他の野手は、ハドルを組んではならない。)
- ④ 試合中、グラウンド内、ベンチ内に於いて、監督、コーチ、指導者のサングラスの使用は認めない。但し、医療目的の場合は、医師の診断書を本部迄提出すれば認める。

- ⑤ 携帯電話、ポケベル、他の連絡用機器はグラウンド内での使用を禁ずる。
グラウンドとは、ブルペン、ダッグアウト、コーチングボックス、及び指導者、選手、審判が
関連を持つ場所を指す。ただし、ラップトップのパソコンにおいて、1台限り、スコア
キーパー目的のためには、使用を許可するが、他の目的においてのワイヤレスの
接続は、許可しない。
5. 審判に対する規則解釈の確認
- ① 監督に限り確認行為を認める。
 - ② ルールの適用で異議を唱えられ紛糾した場合、試合を先に進めることなく中断し、
解決しない場合は両監督立会いの下、以後「意義申し立て試合」である事を
スコアブックに記載して試合を再開する。
試合を再開しない場合は没収試合とする。
 - ③ 意義申し立ての採否は、その球場担当の決定委員会が試合終了時に行う。
 - ④ 異議申し立てが認められれば、チェックされた時点から再試合となる。
 - ⑤ 意義申し立て及び選手交代の通告は監督以外は認めない。
6. 不正選手、違反選手への対処
- ① 不正選手の起用
 - ・ ポニーリーグ本部に登録されていない選手を起用した場合は、没収試合とする。
 - ② 違反選手の起用
 - ・ 違反選手とは、ポニーリーグ本部に登録されている選手であるが、出場資格を
有しない選手(規則違反選手や他チームへ登録している選手)の起用が確認
された場合は、下記の罰則を適用する。
※ 打撃順表へは18名以上の記載を許可しない。
(誤って記載した場合は19番目以降の選手の出場は認めない)
- ★ 罰則
- ・ 対象選手と監督を直ちに退場。
対象選手と監督は次試合への参加を認めない。
 - ・ 試合終了後に違反選手の起用が明らかになった場合、
対象選手と監督は次試合への参加を認めない。
- ☆ 試合後いつまでに明らかになったかに関しては明確な規定がないので、
公認野球規則 7.10 (d) アピール権の消滅の基準を適用し、
両軍がダッグアウトを離れるまでとする。
違反が判明した時点までの試合記録は正式試合となる。
(選手起用の責任は監督とスコアラー)
7. 規則の確認
大会中、規則の適用に疑問や誤りがあると感じた場合、試合中を含めて、チームの
責任者(監督)および審判員は、いつでも大会審判員に規則の確認ができる。